

コラム

COLUMN

日米交流学生大使

沖縄の高校生・大学生等が東京、ワシントンD.C.及びニューヨークを訪問し、政府要人との意見交換等を通じて日米の相互理解を深める「アメリカで沖縄の未来を考える」(TOFU)¹プログラムにはこれまで約170人が参加しました。2025年には、TOFUコミュニティをより充実させるため、参加者の中から4人の「日米交流学生大使」を任命しました。このコラムでは、「学生大使」の声を紹介します。



TOFUプログラムに参加した学生
(3月、米国・ワシントンD.C.)

■ 安永 恵一さん

TOFUでは、日米関係に携わる専門家の方々との対話を通して、特に沖縄と米軍基地問題の多様な見方を知り、賛否だけでは語れない複雑さを実感しました。また、実際に日米の政府機関を訪れ、外交の現場に触れたことは大きな刺激となり、外交官の方々から文化や歴史を理解する姿勢の重要性を学び、将来は外交官として国際社会に貢献したいという夢が生まれました。訪米後は日米交流学生大使として、基地訪問や学生交流に参加し、国境を越えて協力する意義を体感しています。TOFUは、日本の課題に向き合い意見を持つ重要性を教えてくれただけでなく、外交という新たな世界を知るきっかけとなりました。

■ 江田 ひろさん

TOFUに参加した理由は、名称が示す「アメリカで沖縄の未来を考える」という理念に強く惹かれたためです。私は、沖縄という自分にとって最も身近な地域に外側からも向き合う必要性を感じていました。プログラムでは、日頃訪れることのない政府機関を視察し、基地問題や外交課題について普段出会えない専門家と対話し、自らが疑問に感じていることを直接質問できる貴重な機会を得ました。また、多様な背景を持つ仲間の視点に触れながら議論を深めたことは大きな学びとなりました。帰国後は、沖縄で自分たちに何ができるかを話し合い、具体的な行動に移した経験から、背景を知った上での対話と協働が相互理解の基盤になることを実感しました。

■ 奥間 美月さん

米軍基地が町の8割を占める環境で育った私は、日米関係の実態を直接理解し、沖縄の未来に貢献したいという思いからTOFUに参加しました。日米両国の政府機関関係者から日米同盟や沖縄の現状について何う中で、グローバルな視点から物事を捉える重要性を学び、外交において“人と人との交流”が果たす大きな役割を実感しました。さらに、参加メンバーとの交流、現地校の訪問、沖縄出身で活躍されているの方々との出会いを通じて多くの刺激を受けました。国内外での研修を経て得た学びを沖縄の未来を考える次の行動につなげるため、このプログラムで築いた繋がり^{つな}を大切にしつつ、今後も自分に何ができるのかを考えていきます。

■ 尚 瑠美さん^{しょう}

フェンスの向こうには何で入れないのかな？初めて疑問に思ったのは幼稚園の時でした。そこで日本が戦争でアメリカに負けて、沖縄に大きな基地ができたことを知りました。TOFUで渡米するまではアメリカは強く、無敵だと思っていました。しかし、アーリントン国立墓地を訪れて、戦勝国にも広大な敷地を埋め尽くすほどの戦没者がいることを知り、これまで自国の戦没者について学ぶことはあっても、アメリカの戦没者のことを考えたことがないことに気づきました。「アメリカから沖縄の未来を考える」という新しい視点のプログラムのおかげで、何事においても相手側の視点や事実を疎かにしてはいけないと学ぶことができました。

1 TOFU : Think of Okinawa's Future in the United States